

## 宗教教育者、田村直臣について

梅本 順子

田村直臣（1858－1934）は、牧師ということだけでは語りつくせないほど多方面で活動している。それだけにその一生は波乱に満ちていた。最大のものは、いわゆる「花嫁事件」（新渡戸稲造より早くアメリカで出版した著書（*The Japanese Bride*, 1893）を『日本の花嫁』の題で和訳し出版を試みたとき、政府の発禁処分はおろか、日本基督教会からも追放された）が挙げられる。田村の自伝である『信仰五十年史』によれば、キリスト教への入信は、キリスト教そのものを対象としたというよりは、キリスト教なくして日本は欧米のような文明国になれないというところから始まったという。その活動は、いずれも子供や女性といった、当時社会的に弱い立場にあるものと深く関わっていた。

具体的には①宗教教育の実践としての自営館という育英施設の運営②児童文学への貢献（日曜学校で使用するテキストを言文一致体により翻訳）③自称フェミニスト（妻になる人を二年もの間自費でアメリカ留学させる）などがある。さらには、留学からの帰国後も、五年おきに渡米するなど、現在から見ても国際人として通用するような活動ぶりであった。

先に触れたようにいわゆる「花嫁事件」により大きな打撃を受けるものの、一時なりともその活動を止めることはなかった。この後起きた足尾鉍毒事件においても、事件を告発するために演壇に立ち、学生の鉍毒被害地への視察旅行を計画するなど、その活動の手を緩めることはなかった。これほど精力的に活動した田村の原点とはいったい何なのか。そして何をめざしていたのか。これらを念頭に置き、留学を中心にその活動をみてゆく。

まず思春期を過ごしたのが築地であったことが大きい。田村が築地に上京してこなければ、クリスチ

ヤンになることもなければ、その後の人生もなかったという。当時、日本で一、二を争う欧米諸国の事物が結集する築地で、キリスト教を初め西洋文明の洗礼を受けた田村の、欧米を常に意識した人生が幕を開けた。

22歳で京橋教会の牧師となり、滑り出しは良かったものの、フルベッキ（Guido H. F. Verbeck, 1830-98）と共に信州伝道に出かけている間に、教会員の女性とのスキャンダルに巻き込まれた。しかし、彼女の訴えが偽証と判明すると、ほどなくして1882年8月、アメリカ留学に出立した。この留学は、内村鑑三に先立つこと二年であり、アメリカの神学校、ならびに大学で生活を送ったという点では、二人ともほぼ同じである。

田村は、日本にいたときからアメリカで人気のリチャード・ニュートン（Richard Newton, 1813-87）という説教師の児童文学作品を訳していた。さらに『信仰五十年史』によれば、すでに田村は育英施設の運営という夢を持ち続けていたという。『信仰五十年史』の回想をそのまま鵜呑みにすることはできないにしても、内村と比べると、帰国後の活動についてかなりははっきりした青写真を持っていた。それゆえ、アメリカで新たに「宗教教育」という概念に出会うと、それを高く評価して、その概念の実践を自分の活動の中心にすえたのであった。

その一方で、内村のようにアメリカ社会を批判的に見ようとはしなかった。たとえば、田村が留学最初の三年間を過ごした、ニューヨーク州オーバーン（リンカーン政権の国務長官スワードの家と黒人運動家ハリエット・タブマンの家が残る）であったが、その『信仰五十年史』によると、田村は、パーティで黒人に間違えられなかったことに安堵するばかりで、そこに潜む矛盾を取り上げようとはしなかった。この背景には、田村が過ごしたオーバーンでの幸福な留學生活があるのかもしれない。田村の留學時代はおろか、帰国後数年おきになされたアメリカ訪問

## 安重根の信仰と足跡

小 笠 成 美

に合わせて、地元のメディアが何度も田村を取り上げていることから明らかである。それには、オーバーン神学校の関係者に宛てたトゥルー夫人 (Maria P. True, 1840-96) の推薦書やフルベッキによる田村を紹介する手紙などが果たした役割が大きいといえるだろう。

オーバーン神学校にも、次に在学したプリンストン神学校にも、当時の学校のカatalogが存在していることから、田村の受けた授業のあらましやその留學生活内容を知ることができた。いずれにしても、田村の留學生活は、先に触れた人々や現地で知り合いになったアメリカの宗教関係者の好意に支えられていたことが読み取れる。また、アメリカの神学校が特に力を入れた説教の腕を磨くことで、各地の教会や集会に招かれ、金銭的にも潤ったことが『信仰五十年史』で述べられている。留學時代に日本人には類まれな、言葉で人を動かす力を身につけたことが、田村のその後の人生を左右したといっても過言ではなからう。

帰国後の田村は、理想に向かって邁進したが、冒頭触れたように「花嫁事件」が痛手となった。この『日本の花嫁』の発行は育英施設運営のための資金稼ぎが目的であったが、そのような田村の意図は日本で共感されることはなかった。在日の米人宣教師がアメリカの宣教本部に宛てた、田村の事件についての書簡が、プリンストン神学校には残されていたが、田村が周囲と協調できなかったことが、その主たる要因として取り上げられている。

その後の田村は、社会活動への関心から、政治に傾倒した時期があったものの、突き詰めれば、彼が目指したのは、日本という国家の精神的な独立であった。そして、そんな田村の夢を支えるのが、将来の日本を担う青少年であった。ただ、田村の日本人らしからぬ行動、すなわちあまりに自信に満ちたその積極性が、当時の日本人には受け入れられなかった。特に欧米の宣教師に頼らない「ライス・クリスチャン」(田村の造語)を目指すといいつながら、アメリカの知人からの個人的な献金を受けたことなどが批判されたことも事実である。本発表では、国際人田村の活動の精神的な支柱となった、アメリカ留學を中心にアメリカの両神学校に残る資料をもとに概観した。

### 1、安重根 (アンジュンゲン) とは？

黄海道海州にて1879年に誕生した。韓国の名門一家といえる両班 (ヤンバン) の出身であった。

韓国の併合に反対し、抗日義勇団の参謀中將として奮闘し、1909年ハルピンで前韓国統監伊藤博文を狙撃した。日本の関東地方法院で死刑の判決を受け、1910年に処刑された。

### 2、安重根の歴史的評価

安重根をテロリストとの意見もあるが、妥当な意見として次の文を紹介する。

国の衰亡を見たてた義兵を興した救国の英雄となった大韓義兵軍安重根中將、時に1909年10月、韓民族の主権を奪う日本の大陸侵攻の先鋒と見られた。伊藤博文公は彼の手のもとにハルピン駅頭に殉じた。

この事件は日本にとっては痛ましい国家元首の死であり、韓国にとっては悲願する民族保持へのやむにやまれぬ義挙であった。

宮城県知事山本壯一郎記 (宮城県栗原市・大村寺にある顕彰碑の一文)

### 3、カトリック信徒として

父安泰勲はカトリック聖堂に身を投じて、フランス人神父から教えを受けた。安重根は父からいただいたカトリックの書物を読み、フランス人神父ウイレムに教えを受け、受洗した。17歳の時であった。熱心にカトリックの布教活動を展開した。

彼の信仰の特色は次の文言に示された。

「カトリックの信念は信すべきだが、外国人の心情に信じてはならない。日本の奴隷ともならないが、フランスの奴隷ともならない。」

「わが大韓の同胞たちよ、兄弟姉妹たちよ、勇進せよ。退きの罪過をを痛悔し、神の義士となり、現世に道徳の時代を作ろうではありませんか。」

「(キリスト教伝道師に) 私は質問して『これだけなんの罪もない人を虐殺するような日本人に伝道できるか』と言うと、伝道師は『道徳には彼我の区別はない。虐殺するような人はまことに憐れむべきもので、神の力によって神の力によって改善させる

よりほかないので、かれらを憐れんでくれ』と申しました。私は日韓がますます親密になって、平和に治まったならば、ひいては五大州にもその範を示すことを希望します。」

#### 4、日本人伝道（その一）

彼は死刑囚として旅順の刑務所で過ごした。刑務所長町田徳次郎は「安の生活、カトリックの信仰をもつことは、こんなに尊いことなのかと思い、私もできることなら安のような最後をとげたい。だから、洗礼を授けて下さい。」とカトリックの高松教区司教田中英吉に申し出て、受洗した。

田中司教は「人間のもつ苦しみは、キリストの人々のために苦しまれ苦しみにとけ込んで、それをキリストとともにささげることが（町田に）説明したところ、ひとつひとつ納得され、波乱に富んだ一生を平安のうちに閉じられた」と記している。

このように旅順の刑務所長はじめ看守は彼の生活と人柄を通じて、同情と尊敬の念にあふれた。

#### 5、日本人伝道（その二）

カトリックとともにプロテスタントに影響し伝道の実をあげていた。

上村正久牧師は「上毛教界月報」で記している。「自分が旅順で三浦得一郎氏の家に宿泊していると、一人の弁護士がキリスト教の質問に出かけてきた。この人は安重根を弁護した人であった。彼が処刑せられる前日、『天国でまたあいみることもあろう』と言うと、安は『自分もそれを望む。しかし天国で逢うのは条件がある。自分はキリストを信じるからよろしいがあなたはいかがあるか。まだ信じていないならば考えなければならぬであろう。』と言った。そして安の死を見ると、あたかも自分の家に帰るごとくであった。それからこの弁護士は、求道心を起こして好きな酒もやめどうかして信者になりたいと教会へ出入りするようになり、『一心に信仰の道に進みたい』と言った。刑務所長の入信と共に弁護士も入信していた。

#### 6、日本人仏教徒へ感化

旅順刑務所の看守千葉十七は安重根の揮毫の絹布を持ち帰り、仏壇に供えて毎日手を合わせた。それを知って大林寺住職が顕彰碑を建立し毎年法要を営んでいる。

刑務所幹部であった栗原貞吉は日本に帰国後、「家族に不幸がつづき、安重根のたたりであると感じ

て、『安重根明神』を祭った。

#### 7、まとめ

安重根の獄中はパウロがフィリピの信徒への手紙一章にしるされた獄中記のようであると思う。

## 拙著『近代日本の外交と宣教師』

中 島 耕二

はじめに

本書は、1875（明治8）年9月に米国長老教会宣教師として来日したW・インブリー（William Imbrie, 1845~1928）の伝道活動を通じて、「日本の近代化と宣教師」の関係を、今まで検討されなかった政治外交面から解明を試みたものです。以下、内容紹介を致します。

#### ① 第1部 第1章 インブリーの来日まで

インブリーは1845年1月1日、米国ニュージャージー州で誕生。プリンストン大学、プリンストン神学校を卒業し長老教会牧師となり、3年目に海外伝道局から遣日宣教師に指名され、熟考の末これを受諾。歴代唯一、海外伝道局の指名による宣教師となる。

#### ② 第1部 第2章 日本の開国と米国長老教会宣教師の来日

1858年に日米修好通商条約が結ばれ、翌1859年宣教師の来日が始まる。初期来日宣教師は、幕府・明治新政府の切支丹禁制政策に対し、解禁運動を展開。1873（明治6）年2月24日の太政官布告第68号で「切支丹禁制の高札撤去」となる。以降、英米プロテスタント各派から宣教師の来日が急増。日本のプロテスタント・キリスト教は一気に教派主義に傾く。在日米国長老教会ミッションは、超教派主義の日本基督公会（1872年3月10日創立）と教派主義の日本長老公会（1873年12月1日設立）の教派問題に絡んで混乱を来たす。

#### ③ 第1部 第3章 インブリーの来日と米国長老教会在日ミッションの再構築

米国長老教会海外伝道局は、在日ミッションの混乱解決と日本人教職者育成のため、行政と神学の両面に優れた人材を探し、インブリーに白羽の矢を当

てる。インブリー夫妻、1875（明治 8）年 9 月 26 日来日。インブリーは来日後程なくして、教派問題を解決。日本基督一致教会の設立（米国オランダ改革教会・米国長老教会各在日ミッションおよびスコットランド一致長老教会、日本基督公会および日本長老公会の合同）、東京一致神学校（明治学院の前身校）の創立。この間、神学教育、神学教科書の執筆に専念。

#### ④ 第 2 部 第 1 章 ノルマントン号事件とインブリー

条約改正交渉下の 1886（明治 19）年 10 月 23 日、英国貨客船ノルマントン号が紀州沖で遭難。英国人乗組員 30 名はボートで脱出。日本人乗客 25 名は全員溺死。船長は神戸領事の手配で無過失となる。国民は不平等条約が原因と激昂。福澤諭吉はこの審判に対し、宣教師の見解を公開質問する。インブリーが在京浜宣教師代表として回答。宣教師団として遺族に義捐金を贈り、哀悼の意を示す。

#### ⑤ 第 2 部 第 2 章 1890（明治 23）年インブリー事件

1890（明治 23）年 5 月 17 日、本郷グラウンドで第一高等中学校（一高）と明治学院のベースボールゲームが開催される。6 回 6 点差で一高不利の状況下、遅れて応援に駆け付けたインブリーが要領を得ず試合中のグラウンドに降り立ち、一高選手・応援団から暴行を受ける。外字新聞は外国人排斥事件として、キャンペーンを張る。駐日米国公使スイフトから外務省へ抗議が行われ、米国国務省長官ブレインにも事件が報告される。日米間の外交問題となるが、インブリーはスイフト公使に問題の拡大を避けるよう要請。その理由を解明。

#### ⑥ 第 2 部 第 3 章 日清戦争前夜とインブリー

インブリーは滞日 18 年、当初の与えられた使命を果たし、帰国を決意。背景には二人の息子の教育問題、日本社会の国家主義化による日本人キリスト者の変質等があった。帰国後日本基督教会内で田村直臣牧師の『日本の花嫁』問題が起こる。井深（原告側）と田村（被告側）双方から、インブリーのもとにアドバイスを求める手紙が届く。両者に田村擁護の返事を送る。しかし、1894（明治 27）年 7 月、田村は牧師の資格剥奪となり、日本基督教会除名と

なる。1897（明治 30）年 5 月、インブリー夫妻再来日。

#### ⑦ 第 3 部 第 1 章 明治 32 年文部省訓令 12 号と外国ミッションの対応

1899（明治 32）年 7～8 月、改正条約の実施を受けて外国人居留地の廃止と内地雑居が始まる。文部省は宣教師学校の宗教教育規制を図るため訓令第 12 号を公布する。在日宣教師は直ちに学校委員会を結成し、インブリーを委員長とし日本人キリスト者と協力して、普通教育における宗教教育・宗教活動を認めるよう文部省幹部、政府高官と交渉を開始。前総理大隈重信、元総理伊藤博文、現総理山県有朋、樺山資紀文部大臣、青木周蔵外務大臣ほかに直接談判。結果、文部省の歩み寄りを得て、各種学校のまま認可中学校と同等の特典資格を獲得することに成功した。

#### ⑧ 第 3 部 第 2 章 改正条約実施と外国ミッションの対応

外国人居留地の廃止に伴い、在日ミッションは民法のもと財団法人化し、在日ミッション所有財産を法人に移す必要に迫られた。インブリーは内務省幹部と交渉、困難な法解釈を紐解きながら、いち早く在日長老教会ミッションの財団法人化を実現した。

#### ⑨ 第 3 部 第 3 章 改正条約実施と外国ミッションの財産移転問題

財団法人化された在日ミッションに、ミッション所有財産の移転を実施。法人代表のインブリーが所轄の司法省幹部と交渉。全米の長老教会信徒の献金によって得た、在日ミッション所有財産はすべて伝道の目的に費やされるべきで、国庫への納税額は最小にしたいというインブリーの意向に、司法省幹部は理解を示し積極的にアドバイスをした。

#### ⑩ 第 3 部 第 4 章 日露戦争時の宗教問題と宣教師

日露の紛争はキリスト教徒国と異教徒国の戦いとしてロシアによって、欧米諸国に宣伝された。日本政府は、憲法には信教の自由が謳われており、キリスト教徒も大勢いる。日本は決して異教国ではないと反論。その証拠として、日本人キリスト者および欧米来日宣教師に協力を求めて、欧米諸国に逆宣伝外

交を行った。インブリーは桂太郎総理大臣と会見し、桂の主張を聞き入れ、これを欧米一流紙に投稿。各国の新聞・雑誌に転載され、各国から日本政府に同情をもたらした。さらに、インブリーは米国に一時帰国し、各地で日本支持の講演を行った。こうしたインブリーの行動の理由を考察。

## ⑪ 終章 明治国家の完成と宣教師

日露戦争の終結時をもって、日本の近代国家建設が完成されたとされる。幕末に開始されたプロテスタント・キリスト教の伝道も、時代とともに明治国家と対立・接近の関係を繰り返してきた。しかし、この時期以降、天皇主権国家体制が整い宣教師の政治外交面でのリーダーシップは発揮し難くなってきた。それは、日本におけるキリスト教が「政治・社会をリードする価値観と結びつく倫理面が後退し、個人の魂の救済という宗教面で活路を見出」していくものに変容したためと言えよう。

おわりに

日本の近代化の中で、「信教の自由」や「条約改正」問題は、明治政府に取って大きな政治・外交課題でしたが、本書では政府のこの問題に対する政策決定に、「宣教師」が少なからず影響を及ぼしていたことを、実証的に明らかにしました。その結果、日本プロテスタント史、宣教師研究および日本近代史において、今後の研究に新たな視座を提供し得たのではないかと考えます。

## S・ヘーズレット著「日本の監獄から」について

武藤六治

1) サミュエル・ヘーズレット師 (1875－1947)

英国聖公会の CMS(The Church Missionary Society—英国聖公会宣教師協会)から日本聖公会に派遣された宣教師です。CMS は 18 世紀に英国聖公会内に起こった信仰復興運動の機運の中で生まれた任意の宣教師団体で、アフリカやアジアへの伝道を主眼として活発な宣教師活動を行っていました。この CMS が日本での宣教師活動を始めたのは 1867 年のことですが、ヘーズレット師がその一員として来日したのは 1900 (明治 33) 年、25 歳の時でした。

聖公会の聖職位は主教・司祭・執事 (カトリックと同じ) に分けられていますが、ヘーズレット師が来日したのは執事になった直後でした。そして 1903 (明治 36) 年に司祭となり日本各地で働いた後、やがて 1922(大正 11 年)ロンドンの聖パウロ大聖堂で主教按手を受け日本聖公会南東京地方部 (現在の横浜教区) の主教に就任し、爾後主教として大きな足跡を日本聖公会のうちに残すことになったのです。ヘーズレット主教は日本聖公会を統括する主教会議長 (現在の首座主教に当たる) をも兼務しました。多忙な務めの中でも慈愛溢れる師父であり、よき牧会者であったとのこと。2) 日本に於ける聖公会の宣教は 1859 (安政 6) 年に開始されましたが、日本聖公会としての組織が成立したのは 1887 (明治 20) 年になってからです。この年に大阪で第一回の総会が開かれ、日本聖公会は一つの教団として出発したのです。そしてその 50 年後、日本聖公会は「組織成立 50 年」を全教会挙げて祝い半世紀の恩寵に感謝し決意を新たにしました。この折の大礼拝を司式したのは他ならぬヘーズレット主教でした。

しかし、この 1937 (昭和 12) 年という年は、一面日本聖公会 (他の教派もそうでしたが) が経験しなければならなかった大試練の序曲の始まった年でもあったのです。この年の 7 月 7 日の盧溝橋事件をきっかけとして日本は日華事変そして太平洋戦争という暗黒な時代へと突き進んで行く中で、国家総動員法、宗教団体法などが成立しそれらは過酷な姿で教会を締め付けました。聖職・信徒の応召・徴用、日本聖公会の組織の法的解散、合同問題、教会堂の徴用、聖職の憲兵隊連行、聖公会神学院の廃校、空襲による教会堂の破壊など暗い出来事が次から次ぎにと続いて、日本聖公会は未曾有の苦難に直面したのです。殊に日本聖公会は敵国である米英 (殊に英国) と関係が深い教派という理由で官憲の目は非常に厳しいものがありました。ヘーズレット主教の受難は正にこのことの現れでした。1937 (昭和 12) 年から敗戦の年 1945 (昭和 20) 年までは日本聖公会の受難の時代だったのです。ヘーズレット主教がスパイ容疑で逮捕され獄中生活を余儀なくされたのはこの受難時代の前半、太平洋戦争開戦時の出来事でした。

3) 1937 (昭和 12) 年 10 月 5 日のことです。英国ロンドンのアルバート・ホールで一つの大集会が

行なわれました。これは英国のある新聞社が主催したもので、日本の対中国爆撃に対する抗議集会でした。そしてこの集会の座長を勤めたのが英国聖公会のカンタベリー大主教（ラングという名前）だったのです。カンタベリー大主教は英国聖公会（国教会）の中心的役割を担う方です。この情報が日本に入ると官憲は当然のように日本聖公会に疑いの目を向けます。日本聖公会の立場は非常に苦しいものとなりました。殊に英国からの宣教師で、日本聖公会の主教会議長であるヘーズレット主教は大変つらかったらうと思います。この件につきましては日本聖公会からカンタベリーに対して抗議の電報を打ちそれへの返信があったというような事柄がある文書に残っていますが、その内容については何もわかりません。先に言いましたように日本聖公会は英国と関係がある教派と見られ、また、カンタベリー大主教の支配下にあるというような誤解も受けていましたので時の政府（軍部）がこのアルバート・ホルの集会によって日本聖公会殊に宣教師たちに対する疑いを更に深くしたであろうことは想像に難くありません。この件に関して当時の教務院長が文部省の宗教局に呼ばれて何事か問われたようですが、それだけでなく日本聖公会は何故西洋人を総裁（これはヘーズレット主教のことを指していると思います）にしているのか、何故日本人にしないのかとも問われたとの記録もあります。

4)1940（昭和 15）年は日本の皇紀 2600 年とのことで、政府は盛大にこれを祝い国民意識の高揚を図ると共に非常時体制（戦時体制）を強化、思想取締りもますます厳しくなってきました。教会殊に聖公会への監視はますます強められました。更に日本と英米を中心とした諸外国との関係が緊迫度を高める中で、日本聖公会では必然的に英米からの宣教師への対応が問題になってきました。そして結論的には全ての宣教師は辞任して、多くはこの年及び翌年の 1941（昭和 16）年の大戦前に帰国したのです。しかしヘーズレット主教は英国に帰国せずそのまま日本に留まっていたのです。

ここで少し話がそれますがポール・ラッシュという人のことを少し語らせてください。この人は米国人で関東大震災の救援隊として 1925（大正 14）年に 28 歳で来日、そのまま宣教師（教役者でなく信徒）として日本に留まり立教大学で教え学生たちへの宣教に励みながら日本聖公会のために働きました。

戦後も日本に来て日本の農村のために働き 1979 年に日本で亡くなりました。山梨県にあるキープ協会という施設の創始者です。（実は私はこのポール先生によって大学・神学校に送られその後 25 年間ポール先生と共に働きました。）で、どうして今ここでポール先生のことを言い出したかといいますと、ポール先生もヘーズレット主教と同様にあの大戦前に帰国せず日本に留まっていたからです。ポール先生はヘーズレット主教をいたく尊敬していました。ヘーズレット主教はポール先生の大先輩ですから勿論私はヘーズレット主教にお会いしたことはありませんが何度もポール先生から聞かされていました。その二人が、別に相談したからではありませんが、帰国せずに日本に留まる決心をしたのです。その様子をポール先生はこう書き残しています。

「1941 年のある日、米国聖公会宣教師団の最高責任者（ライフスナイダー主教）からの呼び出しを受けて聖ルカ病院敷地内にある師の住居に行った。日本にいた米国聖公会の宣教師全員が集まった。『米国聖公会宣教師団は引き上げる。全員帰国するか、安全なマニラに移るように』と告げられた。必要のない者は直ぐに帰国するようという米国大使館の強い要請に従ったものである。この決定を伝える主教の傍には米国大使館の参事官とナショナルバンクの副頭取が付き添っていた。二人は日本聖公会聖三一教会アメリカ人会衆代議員だった。主教はスピーチの中で私を名指しして『ポール・ラッシュ、特に君のことだよ』と言った。私は幻滅し重い足取りで清泉寮（清里にある施設）に帰った。（中略）私は日本に残る決心をした。……1941 年 8 月 25 日、日本を去るライフスナイダー主教ら宣教師たちを見送るために上京し東京駅の改札口で私達はつらい別れをした。日本にいる米国宣教師は私一人になった」。しかしその直後にポール先生は英国聖公会のヘーズレット主教（ポール先生がこよなく尊敬していた主教）とシモンズ司祭ら（誰方が分かりませんが）も日本に残留の道を選ばれたことを聞きこの決心は自分一人ではなかったと安堵したのでした。

所である方の記録によれば、日本聖公会は当時の日本の国策を先取りして、外国人宣教師退任と外国（英米）からの財政援助を辞することを自発的に政府に申し出たとのこと。そして主教会議長のヘーズレット主教がこれを全宣教師に伝えたのでした。ヘーズレット主教の辞任に際しての言葉が残っ

ていますがそれは非常に胸をうつものです。

それにしても辞任後、他の宣教師は皆帰国したのに何故ヘーズレット主教やポール先生は日本に留まったのでしょうか。それは宣教師としての使命感、日本人と日本の教会に対する愛、これ以外の理由は何もなかったとしみじみと思います。

5) 殆どの宣教師(米・英・加)が帰国してしまっただ後、1941(昭和16年)12月8日にあの太平洋戦争が勃発いたします。ヘーズレット主教(及びポール・ラッシュも)は日本にいました。驚きをもって開戦のニュースを聞いたこの日の午後4時半、四人の私服の刑事がヘーズレット主教宅を訪れ「貴下を国防保安法の条項違反の嫌疑で逮捕する」と告げたのです。ヘーズレット主教の「日本の監獄から」の記述はここから始まっています。「私は、12月8日、日本がアメリカ、イギリスに宣戦を布告した日の午後4時30分に東京の家で逮捕された」というのがその書き出しです。ヘーズレット主教は最初は「私は事情聴取を受けるのだ」と軽く受け止めていたようですが、しかしそうではなくこれ以後囚人としての監獄の生活を強いられることになったのです。(ポール・ラッシュ先生も開戦の翌朝、池袋の居宅に警官が来て連行されました。そして田園調布の多摩川べりにあったカトリック系の女学校「すみれ家政女学園」に強制収容されました。)

逮捕されたヘーズレット主教は先ず横浜の戸部警察署に連れて行かれこの警察署に12日間(12月8日～20日)留置され厳しい取調べを受けます。他の囚人と一緒に監房生活は大変辛いものだったようです。その後横浜笹下という所にあった刑務所に移されました。ここでは独房生活です。12月20日から釈放される翌年(1942年)4月8日まで監禁されていました。この刑務所には40人以上のアメリカ、イギリス及び他の国の外国人が収容されていました。ヘーズレット主教は自分がこの刑務所内でただ一人の外国人でないことを知って安心したと書いています。

6) 1942(昭和17)年4月8日の正午にヘーズレット主教は居房から検査官室へ呼び出されこう告げられます。「君は幾つかの点で法律を破ったが、君の長期間の日本での奉仕や働きに免じて本日釈放する」。逮捕より120日後のことでした。

この日に東京の自宅(東京聖アンデレ教会構内)に

戻った主教はここで約3ヶ月半を過ごし7月30日に日英捕虜交換戦で帰国されました。(序でに言えばポール・ラッシュ先生は6月17日の交換船で帰国しました。)

帰国後、恐らく直ぐに執筆したのだと思いますがご自分の獄中体験を纏められました。それが「From A Japanese Prison」という小さな本となり1943年に出版されました。

7) 先ほども触れましたが、私はポール・ラッシュ先生に非常にお世話になり、そして長い間一緒に働かせていただきました。そのポール先生がある時私にご自分が大事にしていたこの「From A Japanese Prison」をくださいました。もう昔のことです。時間をかけて何度も読みました。そして何よりも大事な本として保管していましたが、ふと考えました。この本をきちんとした日本語に訳しておきたいと。これももう6～7年前のことです。翻訳などしたことがなかったのでこの仕事を当時立教の学院長をなさっていた松平信久先生に「急がなくてもよいですが・・・」と言って翻訳をお願いしました。私はそのまま日本語にしてくださいればよいと思っていたのですが、何と松平先生はヘーズレット主教について、或いはこの書に出てくる出来事の背景について、非常に細かく的確に調べてくださりそれらを駐としてわかりやすく付して下さったのです。その努力や大変だったと思います。そしてこの翻訳「サミュエル・ヘーズレット著『日本の監獄から』」を立教大学の「立教学院史研究」第8号に掲載して下さったのでした。ポール先生も喜んでいました。

「立教学院史研究」からの抜粋を少し大きくしたものを今日みなさんにお渡ししました。どうぞ松平先生の駐をよく見ながらお読みください。

最後に松平先生が訳者前書きの中で書いておられる数行を引用して結びとします。

「本書(From A Japanese Prison)は太平洋戦争勃発の1941年12月8日の当日に、官憲によって逮捕され、その後4ヶ月にわたって収監された著者(ヘーズレット主教)による獄中体験記である。全く予想外の、開戦即日の拘引という衝撃の大きさや戸惑い、それに続く厳しい取調べの日々の様子などがリアルに書き記されている。その苦渋の日々の記録と並んで、このような逆境にも拘わらず、日本人クリスチャンや、良識ある人々への信頼や感謝が

全編を通じて貫かれていること、たゆまざるウィットとユーモアが随所に見られることは印象的である。本書の刊行が大戦の只中であつたことを考えればその思いは一入である。最終章の霊的経験の記述は、特に本書の特質を示すものとして異彩を放つ部分である・・・・・・・・・・」。

尚、この研究会のメンバーでもある瀬川義夫さん（瀬川さんはヘーズレット主教から堅信札を授けられていると聞いています）が「サミュエル・ヘーズレット主教略歴」とヘーズレット主教抑留日誌」という手書きの印刷物を作ってくださいました。みなさんにお渡ししたものです。感謝しています。

## 小崎弘道の同志社社長時代

坂井悠佳

熊本洋学校の第一期生であり、同志社英学校の第一回卒業生である小崎弘道は、日本組合基督教会において、海老名弾正・宮川経輝と共に「組合教会の三元老」と称されている。すでに組合教会の重鎮であり、『六合雑誌』の編纂などキリスト教界で大きな影響力を持っていた小崎は、1890年（明治23）の新島襄の死後、新島の後を継ぎ、同志社の二代目社長となり（正式就任は1892年）、1897年までその職にあつた。この時期は、所謂「国家主義」の台頭期であり、1889年の大日本帝国憲法発布と翌年の教育勅語渙発、それに続いて内村鑑三「不敬事件」、「教育と宗教の衝突」論争などが起こり、キリスト教排撃が厳しさを増していた。教界内では、新神学が流入し、特に組合教会ではその影響は深刻であり、信仰上の動揺を来すものが少なくなかつた。組合教会の牧師養成機関として機能していた同志社において、新神学的傾向は宣教団（アメリカン・ボード）から快く思われておらず、宣教団と日本人側との溝が生じていた。小崎の同志社社長時代とは、キリスト教は教界外から批判を受け、その教界内にも動揺の危機を抱え、誠に多難な時期であつたと言えよう。このような時代に、小崎は同志社という組織の経営の責を担つたのである。

「国家主義」台頭期にあつて、組合教会では、アメリカン・ボードとの関係を断ち切ることによって、キリスト教が「忠君愛国」の宗教であることを示そ

うとする動きが見られた。従来の福音同盟会の教理基準に変わり、小崎の起草による信仰の告白が1892年に制定され、このことを小崎は日本人主導で信仰告白が制定されたとし、日本のキリスト教界において宣教師は「補助者」に過ぎないと評した。さらに1894年、日清戦争の最中の組合教会総会では、アメリカン・ボードからの寄付金謝絶決議がなされた。資金面での組合教会の「独立」が、日清戦争という大日本帝国の「飛躍」の時期に達成されたことは、国家の推移と教会（宗教）の推移とを同時並行的にとらえる視点をもたらした。小崎がかつて処女作『政教新論』（1886）において、「国家独り進歩するを得ず、教会独り隆盛なり難し。皆な其の進歩を共にす」と論じていた通りである。組合教会はキリスト教の対国家的意義を見出し、国家に積極的に関与する方向性を見出したのである。新神学で動揺する教会内において紐帯を果たしたのが、海老名弾正の起草による「奈良大会宣言」（1895）である。信仰告白と言うよりは、道德倫理の表明であるこの宣言により、「国家を振興する」ことが教会の方向性として公にされたのである。

同時期に同志社でも「独立」は達成された。アメリカン・ボードは同志社の奉じるキリスト教について厳密な定義を求めたのであるが、小崎は「基督教主義」の学校以外の回答を与えようとはしなかつた。そもそも組合教会は、教派としてではなく、教会の組合としての意味をこめた組織として設立されたのであつた。続いて同志社はアメリカン・ボードからの寄付金と教員派遣の謝絶を決定し、ここに同志社は「独立」した。しかし、「独立」の代償は大きく、資金難から尋常中学校の設置と徴兵免除の特典を得て生徒募集につなげようと小崎は奔走することとなる。小崎の自筆草稿を多数含む『小崎弘道自筆集』（同志社大学神学部研究室蔵）には彼が京都府知事に陳情しようとした事項のメモや、日清戦後を「第二の維新」と捉え、それに適応する人材育成の必要を述べた草稿が残されている。また『大隈重信関係文書』（早稲田大学蔵）には金策を頼んだものと思われる大隈宛ての小崎書簡があり、この時期の小崎の苦悩がうかがえる。アメリカン・ボードとの関係悪化、資金難、社員間の対立などを原因として、「独立」から間もなくして、小崎は同志社を去ることとなつた。

組合教会と同志社の「独立」が、日清戦争の勝利



という大日本帝国の「雄飛」の時代に達成されたことは、国家と宗教とが共に「進歩」するという考えを確信させるものとなった。そして、『政教新論』には、次の一節がある。「天国ハ一己人にありてハ上帝の意に服従しキリストの心を以て己れの心となし私意私情を去りて神の政治を受くることにて斯る人々増加するに従ひて一国に及び全世界に波及するものなり」。「奈良大会宣言」にも「福音を宣伝し神の国を建設せんこと」が掲げられている。つまり、「進歩」の先には、「天国」「神の国」がある。国家主義的と評される小崎ら組合教会・同志社関係者の国家に対する積極的な関係性は、彼らにおいては「天国」「神の国」に向けた通過点として理解されたのである。

## 都留仙次校長とその周辺

太田愛人

『福音と世界』誌に「明治キリスト教の周辺」を掲載中、たまたま召命について書いたとき、高倉徳太郎と都留の召命について周辺の相違に気付いて都留の召命を書くことになった。『日本キリスト教歴史大事典』に掲載の項目の記者の名はなく、『明治学院史』のみが参考文献にあげられていた。留学が「スコットランドのオーボルン神学校」と誤記されていた。晩年に「口語訳聖書の企てが起こるとフェリス女学院を辞して改訳委員長として専念、57年再び母校に戻り、明治学院長として62年に至った」ことが多の人々の記憶にあることであろう。その後各種委員会、同盟、学院などの理事を努め、原宿教会で礼拝説教の翌日脳溢血で永眠（1964年1月20日）とある。主著に『旧約序説』『モーセの五書』『預言者とその教訓』があり資料室に保管されている。昭和10年前後の出版が旧約学者としての業績を遺している。フェリス女学校々長時代は戦時下と学校運営などで研究や著作の仕事に集中できなかったことを推測できる。校長時代のことは学生の記憶の中にあ留められている。戦時下、キリスト教への圧迫が強かった中で校長を努め、一貫して礼拝を欠かさずに守り続けたことは、現在八十歳以上の卒業生の記憶にのこされていることを二、三人の証人からプロテスタント史学の席上で聞いたことがある。学歴や教職について似た経験を持つ戦後、都

留の何代か後に東京神学大学学長からフェリス女学院院長に就任した桑田秀延の回想的随筆によって都留の人と業績を知ることが出でき、都留の貴重な文献と証しとなっている。桑田秀延全集（キリスト新聞社）第七巻に桑田は「キリスト者列伝」の項で都留を描写していた。『日本キリスト教歴史大事典』には洩れている部分なので抄述してみる。同時代者だけに歴史的背景が理解できる貴重な記録となっている。

「都留と出会いは、大正二年に私が明学に入学した時以来で、私は神学部本科で旧約を学んだ弟子である。その後大正12年から昭和5年（日本神学校創立までは、同神学部における同僚としていろいろお世話になった。その間、中山昌樹、郷司慥爾、村田四郎、渡辺勇助、山本喜蔵、英義雄、鷺山第三郎、後に渡辺善太、遊佐敏彦らと月一回家庭回りの『研究会』をもち、親しく交わった。

したがって私は、都留については、いろいろな角度からかなりよく知っていると思っている。まず、旧約学者であった。神学部では、旧約の諸学やヘブル語を教えた。今日からふりかえてみて、彼の生涯を貫いて最も大きな影響を与えたのは、旧約聖書ではなかったかと思う。もちろん新約聖書やカルヴァンの進学の感化のあったことも否むものではない。

しかし、ややオーバーな言い方をすると上述のように言えると思う。旧約で訓練された彼には、聖と義に対する感覚が甚だ鋭く、妥協しない一面があった。しかし他面必要のないところで理屈をとおし、協力に困難を感じしめるところがあった…」このため桑田は「もっと早く明治学院長になってよいかたであったと思う」、「都留家が裕福であったため、人の世に苦勞を他の人のように経験していなかったところからきているのかもしれない」ことをあげ「英語の実力を備えたかたである」として井深院長と比べていた。

フェリス女学院時代、特筆した一事があるとして「当時横浜のあるところに軟禁された外国人宣教師たちを、随時訪問して下さったことである。これは当時の状況にあったのを、彼は日本の教会を代表するつもりで問安して下さったのである。これは、当然宣教師たちの大きな慰めと力を与え、戦後その時の感謝の意味で都留はアメリカに招かれたのであった」と書いている。49年には米国オーク大学

からDDを与えられている。

都留の言行の中に桑田が指摘したような旧約的、カルヴィニストの厳格なところがあった。甥の都留重人もカルヴィニストと書いていた。旧長老派の神学教育が分散していたのを一校に統合することが多田素から上提されてから 1930 年明治学院神学部と植村が創設した東京神学社が合併した時、都留は村田、桑田と別れて明学に留まった。

桑田の記述の中に都留が裕福であったことを書いたが、思いがけない都留の甥の経済学者重人の自伝『いくつもの岐路を回顧して』（雑誌「世界」に連載）の中で都留家の歴史や大分県下の開拓事業に熱心であった祖父音平の信仰について書いていたことを発見した。祖父音平が 1889 年、宇佐に来日した宣教師ポートルの説教を聞いて、直ちに「これだ！」と感得して夫妻は洗礼を受け、明治の終わりに近いころ子どもたちに、『お前たち 5 人のうち一人は、是非キリスト教の牧師になってほしい。そうなった場合、牧師の生活は楽ではないと思われるので、その時は一同で助け合うように』と語り教えた。」と記している。続けて「5 人兄弟の中で経済的に一番成功した私の父は、神学校に志した仙次の一家にかんしては、子供たち我々に向かい『お祖父さんとの約束だから、仙次一家に不自由させることはできない。だから、お前たちもぜいたくは我慢するように』とさとすことは忘れなかった。」と叔父の献身の内実を述べている。

都留仙次は、アメリカのオーボン神学校、イギリスのエディンバラ大学で学んで帰国し、明治学院教授、院長になる。都留重人は仙次が関東大震災では朝鮮人をかくまったこと、院内の配属将校を説得して赤坂第一連帯の本間雅晴連隊長に面会してキリスト教に理解ある将校の配属を要請したこともあると書いています。戦争中はフェリス女学院で、礼拝を欠かさなかったために生徒に強い印象を与えた。重人は仙次が「徹底したカルビン主義者であると同時に絶対主義者でもあった」と書く。一橋大学を定年で辞めたとき、引く手あまたの中で新設の明治学院国際学部のために赴任したのも、祖父の志をつぐためであった。重人が八高時代に治安維持法のため除籍になったとき、父は留学を勧めたが、留学先を決めかねて仙次に相談した。仙次は、ナチス・ドイツの大学を避けアメリカの大学に進学を勧めて甥の将来に影響を与えた。

自伝の第十章「開戦、戦時下の生活、そして交換船で帰国」の中で長野の宣教師ダニエル・ノーマンの次男で外交官・歴史学者ハワードとの出会いも書いている。浅間丸への交換のときノーマンの姿を見つけ、「日本経済史にかんする蔵書を君にあげる」と 10 秒くらいの間に耳打ちされたことが、ノーマンや都留の友情にマッカーシズムの暗い影をおとすことになる。

ノーマンは戦後、岩波書店で『忘れられた思想家安藤昌益』を著し、都留は片山内閣時代『経済白書』を執筆し経済界を指導した。

都留の父伸郎は 16 歳から 18 歳にかけての時期、「山川均と同級でかなり親しくしていたということなど、私は、父が 1949 年に亡くなった時山川さんから鄭重なお手紙を頂いて、初めて知る」。山川は重人への手紙に「御尊名はかねて承知していましたが、都留信郎氏の御令息であることは少しも思い及びませんでした。今日ふと二、三日前の古新聞を広げていましたところ、凶らずもご尊父様御逝去の記事を見出しまして驚きました。明治 28 年—30 年の二か年間、私は京都の同志社で御尊父様とは同じクラスでしかも仲間で特に親しいあいだがらでした」と書く。都留と山川はこの手紙の前後に会っていた。信郎は口下手だったが、仙次の方は能弁で愛想よく聞き上手であつたらしい。重人は大学辞任後、明治学院教授として福祉論や環境論を講じた。山川の妻は労働省初の婦人少年局長に就任して婦人行政に尽力する。

以上都留家の信仰について紹介したが、多くの伝道者に比べると裕福と言えよう。明治時代のキリスト教界にあって、天職の展開が周縁に及んで伝道に貢献していく。ひいては伝道者誕生のきっかけともなっていたのである。

ハーバード・ノーマンの兄ハーワードは宣教師となり、晩年は父の伝道地長野県で塩尻の開拓伝道に従事した。明治のキリスト教で召命がもたらす家庭の波乱は表面的には現われにくい、無視はできない。都留とは対照的な高倉徳太郎の場合、召命による父子の確執はすさまじかった。都留より一歳年長で同じカルヴィニストであった高倉徳太郎は、東京大法学部を中退して東京神学社に入学したいと献身を表明したとき、父から電報「オヤヲコロスコカ」を受け「オヤハコノタメニシネ」を返電した。高倉の父も信徒であったが、衝撃を隠せなかったのだ。

昭和5年、明治学院神学部と高倉が校長をしていた東京神学社の合同に都留仙次は反対して明治学院に留まった。合同してから新しく日本神学校が生まれ、今日の東京神学大学の元の一つになっている。

翠川洋子「昭和20年のお正月、はっきり都留先生はこの戦争は1日も早くやめ給えと祈られた。今になればりっぱだけど、その時はその言葉はショックだった」

安東治子「でもそれを口に出すというのは余程の勇気のいることですね。そういう校長先生のお考えが全校を覆っていたと思うんです。それで私たちも下手に熱狂的に国の戦争に対してついて行くという気持ちにならないでいられた」都留先生のお祈りの最後にいつも「今日も味方の兵士の上にお恵みを、それと同時に敵の兵士の上のもの」とお祈りされたのを覚えております。

【付記】本稿は「福音と世界」誌（新教出版）連載の「明治キリスト教の周辺」に掲載した。「献身の周辺」（2012年9月）の原稿に大幅な加筆をしたものである。

## 研究発表リスト（その35）

2011年3月19日、第323回例会（辻直人氏の出版記念会を予定していたが、3月11日に起こった東日本大震災のために延期した。

なお例会の回数ですが、3月19日の例会ができなかったにもかかわらず、この例会を回数に入れてしまったので、訂正したい。2011年4月16日の例会を323回とし、回数がずれるので了承願いたい。

第323回 2011.4.16 松縄 善三郎

「カナダ・メソジスト教会の静岡伝道と女子教育—静岡バンドと静岡英和女学校の設立—」

第324回 2011.5.14 辻 直人

「近代日本の教育交流とキリスト教」

辻氏が『近代日本海外留学の目的変容』2010年11月に東信堂から出版したのを祝いして出版記念会を行なった。

第325回 2011.6.18 小林 恵子

「日本の幼児保育につくした宣教師—北陸第一幼稚園を中心に—」

第326回 2011.7.16 森山 みね子

「宣教師達の遺産とその傍流—横浜英和学院創立130年史より—」

第327回 2011.9.24 暮石 圭子

「上海租界草創期におけるプロテスタント伝道の実態—W・J・ブーンの活動を中心に—」

第328回 2011.10.15 宮城 幹夫

「平良修牧師の人生と神学—沖縄の米国統治下に於けるキリスト者の応答（1945-1972）—」

第329回 2011.11.19 渡辺 英男

「アメリカのヘボン」

明治学院歴史資料館主催、明治学院大学キリスト教研究所、横浜プロテスタント史研究会共催

第330回 2011.12.17

「足尾鉍毒事件と横浜の女性」江刺 昭子

「横浜YWCAと『時代を拓いた女たち』」

中積 治子

第331回 2012.1.21 梅本 順子

「宗教教育者、田村直己について」

第332回 2012.2.18 小笠 成美

「安重根の信仰と足跡」

第333回 2012.3.17 中島 耕二

「近代日本の外交と宣教師」

『近代日本の外交と宣教師』という本を2012年1月に吉川弘文館から出版しました。そのお祝いということで出版記念会を開きました。

第334回 2012.4.21 武藤 六治

「ヘーズレット著『日本の監獄から』」

第335回 2012.5.19 坂井 悠佳

「同志社社長としての小崎弘道」

第336回 2012.6.16 太田 愛人

「都留仙次と明治学院」

第337回 2012.6.16 齋藤 元子

「米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動—日本との比較を通して—」

第338回 2012.9.8 石部 公男

「『友愛の政治経済学』をめぐって」

第339回 2012.10.13 山下 英一

「わが高橋五郎」

☆会員の佐々木晃先生が当研究会に葉書を200枚も寄贈して下さいました。感謝申し上げます。

### 【編集後記】

例年より発行が遅れましたこと、お詫び致します。原稿の字数が多いものがありましたので、ページが増えました。ご了承願います。（岡部一興記）